

高崎高校同窓会報

第23号 平成元年11月30日

1989

発行所
高崎高校同窓会
〒370
高崎市八千代町
2-4-1
TEL
0273-24-0074





〈表紙〉 岩山 猛(49回)

高高同志会報 No.23 目次

あいさつ……………同志会会長 柴山大五郎	3
定着と活性化……………学校長 磯貝 福七	4
高高、このよき伝統校に赴任して……………	4
「翠樹」歌碑建立について……………教頭 宮川 清	5
風と緑の観音山丘陵……………重田 精一	6
特別寄稿	
上和田の高崎中学……………安藤 文夫	7
乗附の里の古い道……………内山 信次	8
思い出すままに……………佐藤 収宏	9
論 壇	
国際文化交流と日本の役割……………田島 高志	10
私の回想記⑨	
思いつくまま……………有田 喜一	11
「谷川俊太郎詩集」のこと……………佐藤 健二	11
通信制は宝の玉手箱……………尾張 久雄	12
返ってきた鉛筆……………松本 資雄	13
卒業生の作品紹介⑤	
美術と私……………深井 隆	12
同志会だより	
卒業生にネクタイピン……………同志会事務局	14
京浜同志会……………中曾根信雄	14
翠樹育英会設立五年を迎えるに当たって……………田中 順	15
須藤良太郎氏参議院議員御当選……………同志会事務局	15
母校だより	
平成元年度職員異動……………	16
学芸部報告……………	16
運動部報告……………	17
第四三回高高・前高定期戦……………	18
最近の進学状況について……………真砂 芳夫	19
翠樹文庫……………吉永 哲郎	19
同志会会計報告・予算案……………	20
新年総会へのお誘い……………	20
事務局だより……………	20



光輝ある同窓会

会長 柴山 大五郎

私が計らずも同窓会会長に推されて、二年を経過します。もともと微力で、その任に非らず。その上、健康も芳しくなかったものですから、固辞したのですが、是非と言う強い要請があり、断り切れず名譽のことでもありますので、お受けすることに致しました。

長い間、同窓会に関係し、副会長を勤めて来ましたが、私の事は大体知っていたつもりでありましたが、いざ会長になりますと、光輝ある同窓会の重みが、肩に重く掛って来ることを覚えました。

幸に、我が同窓会は、会員の素晴らしい協力と团结によって、他に類を見ない活動を誇っています。その代表的なものが翠巒育英会の事業であります。また新春早々に開催される厳肅な總會、続いて開かれる先輩、後輩が渾然とした懇親会の盛大さ、正に我が同窓会の真意を遺憾なく表わしたものであります。この總會を担当する当番クラスの周到な計画と準備に常に敬意を表している次第です。

同窓会の性格上、年老いた先輩から、学窓を出たばかりの多感な青年まで、異った世代に教育を受けた会員の多くの集りであります。それなるが故に、各会員に満足がいける運営を行うことは至難であり

ます。他校ではよく会費が集まらない。記念事業をしたくとも、なかなか持ち上らないと言う事を聞きますが、我が同窓会は、先輩の営々としたご尽力と会員諸君の母校愛に徹した高々精神によって、ご協力を賜り、感謝しているところであります。

昭和は既に終り、赫々たる平成の時代に入りました。幸に、我が国は世界をリードする大国になりました。そして、この発展は止まる処を知りません。この期に、同窓各位におかれましては、社会の各方面でご活躍のことと存じます。

先に、福田・中曽根両先輩が、時を隔てず總理大臣に就任せられ、国威を世界に大いにかがやかし、して下さいました。同窓会としては、これに過る名譽はありません。後輩の諸君も両先輩に続いて、世のため、人のために折角ご努力されんことをお祈りします。なお、本会報に社会的に活躍されている同窓のご紹介を賜り、紙面を一層充実することは大切なことと思ひます。是非ご協力下さい。

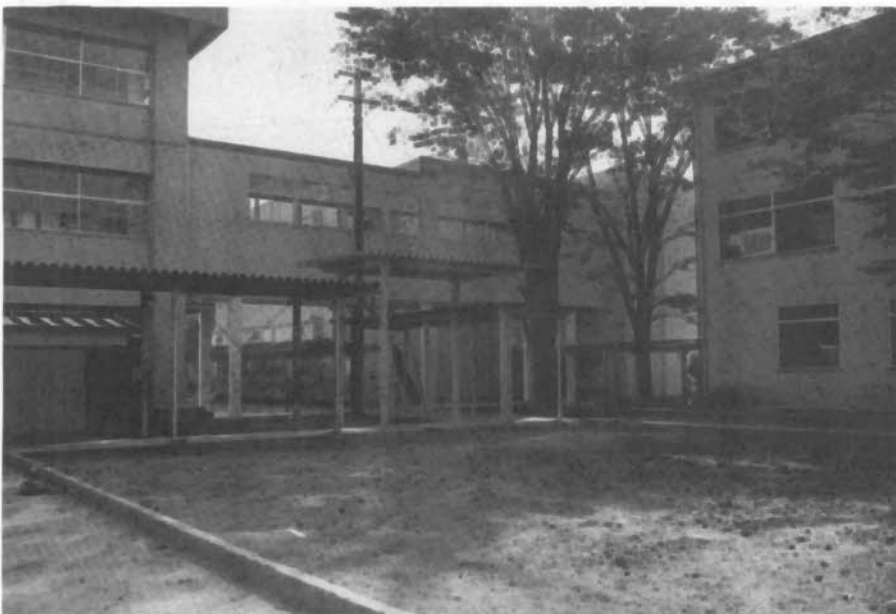
最後になりましたが、皆様のご協力を得て、同窓会活動が一層盛んになることを祈念し、併せて、会員諸君のご健康とご活躍を願うものであります。

(大和設備工業株式会社社長 32回)

同窓会報第一号から第七号をお持ちの方へ――

同窓会報も今回で第二十三号になりましたが、現在事務局(学校)に保管されているのは、第八号以降です。開校百周年に向けて、色々と資料をそろえたいと思っています。そこで、同窓会報の第一号から第七号を保存していらっしゃる同窓生の方はぜひ高崎高校(〇二七三二四〇〇七四)までご連絡下さい。よろしくお願いいたします。

(同窓会事務局)



理科棟への通路完成



定着と活性化

学校長 磯貝 福七

高崎高校同窓会の皆様には、常日頃より、本校の運営につきまして、温いご支援ご協力を賜り、心より感謝いたしております。

紙幅をいただきましたこの機会に、本校経営につきまして、私の所信の一端を申し述べ、併せて高崎の現況をご報告したいと存じます。

本校創立百年に向けて、私は、「清新で活力に富んだ、信頼と礼義を重んじる教育」をモットーに、生徒・職員と一体となって微力を尽くしてまいりました。その間、旧来の教育課程や学校行事の見直し、教育環境の整備等、伝統重き高崎の、さらなる飛躍を目指して、改革の鉾を振うことも五指に余るほどはございました。こうした経過の中から、本年度の学校経営の基本を、「定着と活性化」に定めました。一見矛盾するこれら二つの視点こそ、百周年を間近にひかえた高崎に、現在最も必要なものであると確信したからでございます。伝統の根本が、不易と流行にあるならば、本校においても、新しい試みを根付かせ、従来からのものは、生き生きとよみがえらせようというこ

とであります。

さて、最近の本校を振り返ってみますと、さる五月二十日には、第三十八回、三十九回、四十回、四十一回、四十二回の卒業生の有志ご一同によりまして、正面玄関左の一角に、応援歌翠櫛の歌碑が建立されました。その碑文には、「汗と涙の青春 血潮ぞたぎる若き日の思いを偲びつつこれを建つ」と刻まれております。「汗と涙の青春」は、平成元年の高崎生にも、また然りでございます。必ずやこの歌碑は、後輩の高崎生の魂をもゆすぶり続けるものと考えております。関係された卒業生の方々に、衷心より感謝申しあげたいと存じます。また、現役生につきましては、陸上部・軟式庭球部・水泳部等が関東大会に出場し、音楽部・美術部・将棋部等が全国大会に出場しております。学習面でも、六十三年度末の大学入試におきまして、顕著な成果をあげましたことを、ご報告いたします。

柴山会長のもと、高崎同窓会の一層のご発展を祈念して、筆を擱きます。



高崎、このよき伝統校に赴任して

全日制教頭 宮川 清

四月一日付で「高崎高校への赴任」を命ぜられた時、一瞬耳を疑いました。前任校（桐生西高）には教頭になって未だ二年、ようやく創立九年目の新設校で十周年記念事業に向けて学校づくりに取組んでいた矢先のところでありました。突然の転任命令に驚くとともに、九十年を超える歴史の伝統校への赴任など、とても考えてみなかったことでありました。また、教職について六回目の転任ではじめて利根川西の地での勤務でもありました。

これほどの伝統校、進学校でうまく動まらなうかということが、先ず、偽らざる気持ちでありました。そして自分の特性のどこが買われたのであるうか、また、どのような個性が活かせるだろうかと、数々の不安がありました。期待と不安を抱いて赴任後七ヶ月が過ぎました。

春の翠櫛祭、夏季ゼミ、秋の高前定期戦と、学校行事の中のビッグイベントが皆様のご協力をもちまして終了し、年度末最大の冬の陣——三年生の大学受験、二年生一年生の実力充実に向けて学校が順調に動いている昨今、よう

やく、本校に奉職する機会に恵まれたよさが心の奥底から盛りあがって来て、幸福感と充実したリズム感の教職生活を味わいつつあります。

伝統校・エリート校のよさとは何であらうか、それは何処からもたらされるものであらうか。これらの良さを一層活かして、すべての生徒の所得にするにはどのようにしたらよいであらうか。——その解答は早急に得られるものではないものの、というのが、本校での勤務課題として考え続けてみようと思っております。

赴任以来ご厚情をいただいている同窓会・PTA各位や、教育後援会・翠櫛育英会・同体育会の方々、そして、清新で多様かつ武骨で、しなやか、繊細にしてクレバーな生徒群像、音楽や哲学活動等に見られる高崎市民の文化性・先進性などからこの課題の解答は一般的解答と、高崎固有の解答の両者を追うことになることと目論んでおります。

このような勤務課題を胸に据えて努力するつもりでおりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



「翠巒」歌碑建立について

校舎移転五十周年
記念事業委員長 重田 精一

平成元年五月二十日、高崎高校校庭において、応援歌「翠巒」歌碑建立除幕式がとり行われました。

クラスの仲間たちの友情と信頼の大きな輪のひろがりが集結して、歌碑建立除幕式を迎えたものでありました。

旧制群馬県

立高崎中学校が、上和田町の旧校舎から今日の乗附の地に移転したのは、昭和十三年十二月のことでした。

当時の在校生（第三十八回から第四十二回までの卒業生）は、寒風の中を机、椅子などを運び引越しに従事しました。

以来五十年の歳月を経た今日、校舎移転五十周年記念事業として、当時の在校生有志相集い、相計り「翠巒」歌碑建立を定め、幸にして柴山同窓会長の御高配、また磯貝学校長始め学校当局の御賛同温い御支援を頂きました。各卒業年次発起人諸兄の御尽力と、



黒みかげ石

に榛名山確氷川をイメージしたバックに翠巒の歌詞を刻み、重厚感のある美しい三波石にはめこんだ記念碑の前で、柴山同窓会長、磯貝学校長、学校職員、生徒

代表と参加卒業生有志により、吹奏楽部員の演奏、応援部員の指揮のもと、「翠巒」の大合唱が折からの曇り空をふきとばすが如く湧きあがり、大正・昭和・平成さらに未来永劫に歌いつがれていくことを念じつつ、母校の限りなき発展を祈念いたしました。

（重田医院院長 38回）

文化都市の顔として変貌

高高をみまもる 風と緑の観音山丘陵〈3〉



高崎のシンボルともいえる白衣大観音とそれを取りまく観音山丘陵。高々同窓生にはなじみ深いこの自然豊かな地に、いま都市型リゾート開発の熱い目が向けられている。

中心街から車でわずか10分程で、標高差百餘、面積七千百の緑豊かな丘陵地がある都市は、全国でもそうはない。この恵まれた資源を生かした観光開発こそが、これからの高崎が目指す、魅力的な文化都市としての「顔」になるとというのが、市民をはじめとした大方の見方なのだ。

烏川を渡ると、大きく変貌していく街並みに驚くことだろう。石原や片岡にはしゃれたレストランやユニークな店が次々に誕生している。ドイツ料理店、紅茶専門店、ステンドグラス工房など。最近できた画廊では、高々の同窓生でもある井上房一郎氏（井上工業会長）のコレクション展覧会が開催されるなど、高崎の文化をリードする地域として大きく変貌している。

また、観音山では「たかさき薪能」が、毎年行われている。白衣観音像を背景に、かがり火の幽玄な明かりの中で能や狂言が演じられ、多くの市民がその幻想的な世界に酔う。

カップビアでは、波の立つプールや水のすべり台などを新設し、夏休みには子供たちの歓声がいつぱいだ。また洞窟観音近くには、大正時代にあった鉱泉を再復活した高崎観音山鉱泉が誕生した。展望風呂から見える高崎市街地の夜景は素晴らしい。晴れた日には遠く赤城山も見渡せる。

さらに丘陵には、県の大規模公園の計画や、全国にも例のない市の染料植物園の整備計画なども進められている。



その外にも市民の間からは、森と水（碓氷川）と音楽（群響）のレジャーランドの建設や、各国のミニチュア小人国やドイツ料理のグルメ地帯の建設、群響の野外コンサート場づくりなどの提案が上がっている。

自然に恵まれ、市民に愛されてきた観音山への市民の期待は、どんどん膨らんでいくようだ。

さらに、丘陵頂上からは、全国一ともいえる再開発の槌音が響きわたっている高崎市が一望できる。インテリジエントビルの建ち並ぶ駅前、着々と進む中心街の整備等々。

観音山丘陵は大きく変貌しながら、文化都市・高崎の新しい誕生をじっと見守っている。

特別寄稿

上和田の高崎中学



安藤 文夫

私は昭和八年春旧制高崎中学を卒業しているから、何時の間にかもう五六年の歳月が流れている。毎年ビュー・ホテルで開催されている高崎高校同窓会に出席してみると、同級生の柴山大五郎君が会長として主催している外、私より上級生は当時級長をしていた三級上の本間憲治さんと二級上の土岐正さんの外は本当に数えるほどしか姿が見えない。思えばよく生永らえてきたものと感慨深いものを覚えずにはいられない。

それでも柴山君に代わって私と飯野正雄君がここ数年か幹事になって早春、市内の暢神荘で高々三二会という名前で同窓会をやっているが、こちらの方

にはほぼ二七人位は出席している。私の卒業成績は一〇八人中の五八番と覚えているから、同期の仲間は一〇八人いたことになる。以来半世紀の間に大東亜戦争があり、私も六年半戦地に従軍し、その間幾度か死戦を越えてきた。そして運よく生き永らえて終戦を迎えてもう四四年になる。今日クラス会の出席者が四分の一になったと言っても格別不思議はないかも知れない。しかし昨今気になるのは、二九回の本間さんの期の人々が急に体調を崩されているのを見て、人生八〇年といわれる昨今でも

七〇代というのは急な坂のようである。その意味で私を始め同期の人たちは毎年のクラス会にはぜひ出席出来るように気持ちを引締め、健康に留意して行かねばならないと心に決めねばなるまい。大変情ないことを書いてしまったが、これも同窓会報に原稿を書けという幹事が悪い。現況報告しろとあつては、こういうことになる。

さて率直に言って私が余り優等生ではなかったことは前述した卒業成績でもわかる。勢い卒業後の大学と兵役の一二年間は勿論、復員後家業に戻ってからも、今日まで四三年間同じ高崎市内に住んでいながら、ついで母校を訪ねたことがないのは成績不良のなせる

仕業か。たまたま過日三五回卒業の富田賢二君の葬儀が並榎町の自宅であり、自転車ですこに行った帰り道偶然にも母校の門前の道に出た。私はその昔町内の同級生の川村泰造君や瀬下辰次郎君と連立って毎日学校に通った道を走ってみようと思ひ立った。

まず校門に向かって左側、学校の欄に沿って神武の湯の方に回った。が、当時畑だったところには住宅が立ち並び、全く昔の面影はなかった。それから相生町の旧官宅を横にみながら赤坂を経て、高崎神社を長松寺の方から入り、嘉多町、寄合町を通過して我家のあった田町に着いた。この道筋は道路が舗装された以外は半世紀前と少しも変わっていないかった。

母校は現在市立第一中学校となり、校舎も鉄筋コンクリート二階建てに新築され、当時を偲ぶ縁はない。校門の中に入っても見なかったが、恐らく同じことであろう。要するに私の記憶を呼び起こすようなものはないと言うことである。が、それでよい。

しかし、私の頭の中の記憶は六〇年前と少しも変わっていない。

私が高崎中学に入ったのは昭和三年春である。当時校庭の西側にはもう使っていない二階建ての古い木造の寄宿舎があり、その周囲をクローバーが青々と覆っていた。新入生の私たちはそこに座らせられて、五年生の大男たちが

「お前たちは」と言って訓示をした。その寄宿舎の向こうが下の町で小島鉄工所があった。当時は昭和の大不況の最中で一向に金槌の音が聞こえず、これで会社を持つのかと他人事ならず心配したものである。

朝礼や休み時間に生徒が集まる控え室があり、その近くに相撲場があった。そこで上級生が下級生に鉄拳の制裁を加えていた。大正のころはまだ市内の小学校野球が人気を呼び、町の銭湯に行くと、今年は中央小学校の松山がいとか、北校の小林がいいとか、今様のタレントになっていたものだが、昭和に入ると、中学校野球がそれにとつて変わるようになった。そして今の東口に野球場があり、決勝戦だと言つて全学を挙げて市内をデモ行進をした。その雰囲気の中で校庭では野球の練習が盛んであった。

高崎中学は県下のエリート校で受験勉強も盛んであり、四年になると受験学級が設けられ特別授業と臨時試験があった。私はどちらかと言うとそちらの方に熱中した。お蔭で卒業時には私を含めて中央小学校から一緒の仲間が四人も東京商科大学予科に合格して面目を施した。

上和田の旧高崎中学の校庭の思い出は年齢に関係なく何時までも新鮮である。

(安藤株式会社取締役会長 32回)

特別寄稿

乗附の里の古い道

内山 信次

つたかどうか忘れてしまいました。たが、その三浦先生は関東の不動尊と薬師如来の信仰について二冊のご本を上梓されています。あの頃知らず知らずのうちに先生の感化を受けていたのかも知れません。私も昨年、「徐徐漂（ぶらり）たかさき」という郷土史話の本を上梓しました。今年「応援歌翠幟歌碑」が建立された母校を訪れ、乗附の里に青春の思いを回顧する人々のために、私の徐徐漂たかさきの一節を引いて、思い出の地の史話を語りましょう。

旧制高崎中学校校舎移転五十周年記念事業「応援歌翠幟歌碑」建立委員会の席上、ある先輩は回帰本能として母校に行つて見たいと話していました。この事業の協賛者には、卒業以来一度も同窓会に顔を見せたことのない人達が、各期ともかなりいた模様です。

人はいつか古里の山川や母校への回帰の思いにかられる日が来るのでしょう。同窓会の日に集団で母校を訪れる期もあると聞いています。乗附の里は三八期以後の卒業生の青春の思い出の地です。

五十年の昔、その頃は郷土史などという項目はなかったような気がします。三浦先生のご薫陶の中にそのことがあ

高崎のすぐ西の山は、あの頃造成され建立された護国神社ですが、その上の小さな谷の西に、天満宮の小さな社があったことをご存知ですか。その天満宮の境内の石碑の裏に、この社の別当であった「杉本坊」という寺の名が刻まれています。紀年銘は享和二年（一八〇二）です。

杉本坊はいつ廃寺になったかわかりませんが、この寺は国分にあつた「大蔵坊」とともに、一四八六年の聖護院門跡准三后道興の旅行記「廻国雜記」に記載されていますので、中世の片隅を語るとき必ずといってよいくらい、引き合いに出される山伏寺ですが、今もってその址地を知ることとは出来ません。「徐徐漂たかさき」をお読みの方は

ご存知のとおりですが、私はここに「幻の杉本坊」という話を作りました。

秋彼岸の二十一日、急に思いあって夜中の快速ムーンライトで、坂東三十三所の二番鎌倉の杉本寺と、館山の三十三番那古寺へ御朱印を頂戴に行つて来ました。

道を逆に三十三番からフェリーで九里浜へ渡り鎌倉へ。一番観音の石段下に「大蔵山杉本寺」の石柱を仰いで、やはりそうだと思いました。

坂東三十三所の観音札所が定められたのは、鎌倉幕府開創間もない頃とされ、昨年八百年記念のお開帳が各札所の寺院で行われていました。鎌倉から相州武州を一巡して、横浜の十四番弘明寺から一番の杉本寺は僅か十三キロ。十五番上州の長谷寺白岩観音へは百五十キロ。これは当時二国にあつた観音札所巡礼の寺を、鎌倉幕府の必要性から坂東の全部の国々に配分して、新札所坂東三十三所を作つたに違いないと考えられます。

その必要性とは新付の武者の監視であり、観音の御利益による庶民の宣撫だったのでしょう。そのため一番杉本寺では一役かって、上州の十五番白岩観音の手前の片岡と、十六番水沢観音参拝後の国分に、最もわかりやすく、自坊の山号寺号をそれぞれ寺名とした山伏寺を作り、新札所の案内かたがた幕府の細作スパイの秘密の宿としたの

でしょう。著名な神社は古来時の政權と結ばれていましたし、山伏・聖のたぐいは近世まで謀者の役を務めたことは衆知の事実です。

おそらくすでに過去の時間の中に埋没していると思いますが、野州でも常州でも同じ意味をもった山伏寺があつたでしょう。

三浦先生の純粋な研究とは違い、少々歴史を斜めに見すぎるようですが、とにかく高崎の西の山裾の道は、中世の鎌倉と東山道を結ぶ古い道で、ある時代坂東の観音巡礼の道だったのです。またこの道は、観音や愛宕や飯綱や知立や秋葉や妙見や白髭や駒形や薬師などの神仏が、軒を連ねる不思議な祈りの道でもあります。

あの頃から見るとそこは吃驚するほど変貌していますが、回帰本能の人々の大方は還暦を越えて、地の底からの過去の声を聞くことが出来る年齢かと思ひ、いつの日か母校を訪れる同窓の諸兄のために一文を草しました。

（元高崎市商業課主幹 42回）



天満宮

特別寄稿

思い出すままに



佐藤 収 宏

文字通り戦後教育制度変更をフルに体験した世代であり、戦後の混乱・復興を肌で感じとり、今又、高齢化の時代に突入する日本社会に挑戦する責任をもった世代ではないでしょうか。

高専で過ごした三年間も、私自身の多感な思春期という時期はともかく、学校の歴史の中でも入学試験が実施された年でした。入った早々の五日、マラソン復活問題の賛否投票が実施されましたが、復活が正しいのかどうか分らないままに実施が決まり、全員参加させられました。このマラソン問題が私のその後の高校生活に大きな影響を与え

年月のたつのは早いもので、こうした原稿を依頼される年配に達したのかと少しも考えさせられました。確かにここ数年、同窓・同期の仲間達が一、二人と今までの職場を去り、第二の人生を歩み始めており、健康を害した人達も増えて来ています。

私の世代は、まさに戦後の日本の変動をともに受け、これからも新しい変化に立ち向かっていかねばならない宿命的な世代と感じさせられます。昭和の最後の一桁生まれ、小学校入学時には尋常小学校から国民学校と変わり、五年生の時に敗戦、又中学入学時に六三制実施の新制中学第一期生となり、

弁論部・新聞部・生徒自治会等とクラブ活動に熱中させる動機の一つとなりました。男女共学実施運動も当時の大きな課題で、当時の内藤校長、特に小池先生とは派手にやり合いました。結局のところ説得され実現出来ませんでした。したが、今となってはそれが一番良い結論だった様です。

それともう一つ忘れられない事は、入学の翌年校舎が焼失したこと。旧連隊内での分散授業、新校舎の建設と、短かい高校生活では減多に経験出来た出来事に出逢ったことです。

数々の思い出が次々と浮んで来ます。それらの一つ一つがその後の私の人生

に大きな影響を与えています。

私が生まれ育った高崎にはその後今日まで戻る事が出来ません。仙台・東京・松阪等々。大学・就職・転勤と境遇が変わるたびに転居し、今は柏市に住んでいます。

大学を卒業した昭和三十二年は今と違って、就職難の時期でした。学校はもとより、知人・先輩を頼り、先ず入社試験を受けさせて貰うことから出発しました。就職浪人が始まったのも、この頃からだったと思います。

私が就職した会社は、ニッケルの精錬・販売を主とした企業であり、以降三十年以上も同じ仕事をしております。ようやく入った会社も、まだ戦後の混乱が続く安定しない状態でしたが、朝鮮動乱による特需景気がきっかけとなり、日本経済の基調が大きく変わりました。いわゆる「重厚長大産業」の一つ、鉄鋼業を中心とした経済構造に転換しました。当然な事ですがこの転換にフォロー出来ない業界・企業は景気の後退と共に取り残され、合理化の嵐にさらされることとなりました。総評を中心とした労働組合運動が活発になったのもこの頃でした。

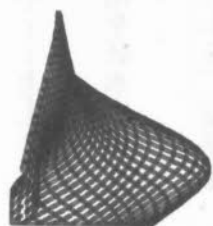
こうした社会の動きの中で私も入社後まもなく組合運動に参加し、安保闘争、水俣闘争等には積極的に参加し、デモの先頭に立って機動隊と対決したものです。現在の組合活動と比較して

その違いには驚かされます。何が原因でこうした変化が生じたのか私にははつきりしたことは分りませんが、日本経済が発展し、国民の生活レベル向上が要因の一つに違いありません。

ただ私の心に何か割り切れない思いが残るのは外国に比べ真の豊かさに欠けているからです。表面上の華やかさに比べ、地に着いた本当の豊かさに欠け、経済的にも、精神的にも満足出来ません。政治が悪いのでしょうか。私達一人一人が反省すべきなのではないでしょうか。

その後年月の経過と共に、組合幹部から管理者と変わり、皮肉な立場に追い込まれました。それはその後二度にわたるオイルショックが私の企業を直撃し、長期に亘る不況が続く多くの仲間を職場から去らせるといふ予期しない事態を数多く経験させられました。私共世代はこれまで仕事を中心に真剣に生きて参りましたが、これからの事を考えると、期待と不安と同時に責任の重さを感じます。今の世に欠けている真の豊かさを求め、その実現のため努力するつもりです。

(志村化工(株)取締役社長 52回)
(東京ニッケル(株)取締役社長)





国際文化交流と日本の役割

田島 高志

我が国は、世界全体のG N Pの二割以上を占める経済大国として、経済のみならず、政治、社会、文化等諸分野における国際社会の発展のために大きな責任を有している。

従って、我が国は、自国のことだけでなく、他国のこと、地球全体のことを考えて行動しないと、世界の嫌われものになるだけではなく、資源の枯渇や保護主義を招き、やがては自国の衰退、自業自得となりかねない。今や政府も民間も、日本の持てるあらゆる力を世界の繁栄に役立たせるといふ発想と心構えが必要な時代となったのである。

政府は、昨年「世界に貢献する日本」の実現のため、政府開発援助の拡充、国際文化交流の強化、平和のための協力の三本柱からなる国際協力構想を打ち出した。これは、現在の海部内閣にも引継がれている。

国際文化交流の第一の目的は、世界平和の構築である。世界には国や民族により異なる文化（思想、芸術、生活様式等）がある。文化交流を通じて、相互に文化の多様性を理解し、異なる文化を尊重し合う寛容な国際社会を形成することが、世界平和の基礎となるものである。その意味から、国際文化交流は何れの国にとっても安全保障のための不可欠の要素と言ふべきである。

第二の目的は、世界の文化の発展に対する貢献である。文化は交流によって相互に刺激を受け更に豊かなものに発展する。また、各

国の優れた文化遺産を守ることへの協力も重要である。

第三の目的は、世界の対日関心の高まりへの対応である。世界の中で大きな存在となった日本の経済発展を支えた文化的背景は果してどのようなものかとの関心から、海外での日本語学習者の急増、日本研究講座の増設、日本の伝統的及び現代の芸術文化紹介の大型行事の各国での企画という現象が起こっており、我が国に協力要請が次々と来ている。我が国としては、これらに積極的に応えるべきである。

第四の目的は、日本の社会を国際的に開かれたものとし、異文化との接触を増やすことにより、我が国の国際化を進め、より豊かな文化を持つ国へと発展させることである。

このような意義と目的を持つ国際文化交流を進めるに当たり、留意すべき観点がいくつある。第一には、自国を積極的に知らせることである。従来、我が国は外国を知り、学ぶことには熱心であったが、これからは、自国の社会、文化、考え方を諸外国によりよく知って貰うことが重要である。日本製のTVや自動車等製品は世界に氾濫しているが、それを作っている日本人の「顔が見えない」、「得味が知れない」と言われている。

第二には、一方通行ではなく、両面通行を進めるべきである。特にアジア、アフリカ等途上国との交流においては、こちらの押しつ

けにならないよう、相手の文化を日本に紹介することにも協力すべきである。

第三には、人的交流の重視である。留学生交流、青少年交流、有識者交流、JETプログラムなどは日本の友人を世界に広げるために一層拡充すべきである。

第四には、第三国間の交流にも協力したり（例えば、我が国の提出したアセアン文化基金）、文化遺産の保存への協力（我が国は、本年度にユネスコに文化遺産保存日本基金を設ける予定）も進めるべきである。

以上の見地に立ち、政府は予算増に努力している。外務省所管の特殊法人国際交流基金は、国際文化交流の中核の実施機関であり、その強化は特に重要である。

平岩東電会長を座長とする有識者の「国際文化交流に関する懇談会」が本年六月総理に提出した提言を踏まえ、政府は引続き諸施策を実施していく方針である。

最近、地方自治体や民間企業も諸種の国際文化交流活動を活発に展開している。経団連には、国際文化交流委員会が設けられ活動している。国際文化交流は、調和ある国際社会を形成するため日本の果すべき重要な役割として、国民全体が取り組むべき課題であり、今後ともその強化に一層の関心と努力が望まれる。

（駐ブルガリア大使、

前外務省文化交流部長 53回）



講堂

私の回想記

思いつくまま

有田 喜一



このたび同窓会事務局より回想記なるものの依頼を受けたのですが、まだそんな年代とも思われず、何を書いたらよいかとも思いつきませんので、今の心境なりを綴らせていただきます。

私は現在六十期代表幹事を仰せつかり、高々在職中の友人達の協力の基にその職を務めている訳ですが、私自身高崎に誕生して十八年、その内わずか三年ばかりを高崎高校に通学、当時は三白景気でもあり、石油化学の勃興期であったので化学系を目指して勉強していたのだと思います。今それ程印象に残っていないのは既にその頃受験戦争が始まっていたのかも知れませんが、同時にクラブ活動をしていなかったの印象が薄いのかも知れず、大学進学後、部活動、自治会活動をやった関係から子供達には中学・高校と部活動を勧めています。しかしながら自分としては高校・大学を通じて友人は多い方だったと思っています。

卒業後、東京に十四年、滋賀県に八

年、現在約二十年振りに高崎に戻り、早くも八年程になろうとしています。そんな訳で高崎以外で活動していた時期が長く、又仕事上県外での仕事が多い人生を過ごしています。

一方、我々の年代を同窓会活動で調べてみると県外に大半の同僚が存在し、常時会合している県内の仲間も二十名位です。このような現状ではあります。同窓会幹事年を迎える活動やいろいろ仲間迷惑もかけましたが九十周年寄附金活動を通じて、今高校時代の面影が蘇っている昨今でして、現在では通信はがきを出しますと三七〇名の旧友に対して一六〇名から返信がくるようになりました。

一方世の中が急速に変化していく中、私自身の仕事についても大きな変化の中で従来以上のスピードで変化が起っており、振り返ってながめることよりもこれから何が起るかを見つめることが常態となっています。日本人は大変なスピードで技術進歩を行なっていますが（私がこゝで技術革新と云わないうのは奉仕を伴う技術サービスが多く、本来の革新であれば対価が得られるのと異なるためですが）このような環境は諸外国では追従できないのではないかと最近考えています。

このような企業競争の最中において高校時代の一コマを振り返ることは一服の休憩に似ていると同時に今はやり

の異業種交流の場でもあるような気がします。

これから同窓会活動を通じ広く人生観の形成を心掛けると同時にもっと広い人間交流にも挑戦し続けたいと思っています。

（群栄化学工業株式会社 取締役社長 60回）

「谷川俊太郎詩集」のこと

佐藤 健二



二年前に『読書空間の近代』という書物を書いた。かつて本でしか名を知らなかった先生がたや、会ったこともない人たちが、読んで評価して下さるのは嬉しい。だが柳田国男の少年期を指して書いた「読書童子」の語を、本屋の息子なんだからあなたも同じでしようといわれると、いささか困惑する。明治の学者たちほどに早熟でも、食欲でもなかったからである。

たしかに書物は身近なおもちゃで、積み木や踏み台としてだけでなく、開いて読みふけることもあった。だから

むしろ高々時代の方が、書物との距離は大きく、複雑であったように思う。恵まれた豊かな時代だからといって、青年と本との関係は平穏で幸福であるとは限らない。伝説に聞く旧制中学ほどに特権的なものではないにせよ、高々生が知的な側面で背伸びする風習は残っていた。そんな雰囲気に対し、僕の方はというと、じゅうぶんに屈折していて、読まずに自慢するほどに無知ではなかったが、冊数を競うような執着とは無縁であった。とりわけ、文学と呼ばれたジャンルには、あまり熱中した記憶がない。名高い教養哲学書に挑み、流行の小説を抱えた「ブンガク青年」(それは多くのばあい、通学電車の女の子たちを意識した見栄ぶくみだつた)が煙たかったし、そもそも単なる読書にどんな意義があるのか、信頼できずに迷っていたからである。

ところが、思いがけなく回想記の寄稿を頼まれて突然、谷川俊太郎という詩人のことを思い出した。そうだ、この詩人の本だけは、この頃例外的にずいぶんと読んだ。高校生時代の屈折の内実も、悩みの内容もすっかり忘れてしまっているけれども、文庫判詩集を開いての感動は明確に覚えている。出会いは偶然の「立ち読み」であった。コトバが人を動かす力をもつということ、おそらく初めて、しかも背筋を震わすほどの衝撃力で教えてくれた。

大学を選ぶ段になって、僕は自分のコトバでじっくり考え、モノを書くという学問の路を選んだ。父は息子の進路や勉強のことにについて、一言も言わなかったが、ほんとうは法学部への進学を期待していたかもしれない。しかし僕の方は、小説嫌いの文学嫌いにもかかわらず、そしてすぐに詩集などまったく読まなくなるにもかかわらず、文学部系の学問を選んだ。振りかえってみると、その選択の背後に、若き詩人のコトバの明晰さへの感動があったように思う。「ぼくはやっぱり歩いていくだろう」(中略)／すべての新しいことを知るために／そして／すべての僕の質問に自ら答えるために」という、十八歳の谷川の志向へと共鳴した僕自身の「社会学」を予言していた。奥深く広がる書物の森に本格的に迷いこみ、僕自身の冒険を始めるのは、このあとの話である。

(法政大学助教授 74回)

美術と私

深井 隆



卒業生 作品紹介
(5)

三年になると進路別に、文系・理系・美系・音系と分れた。美系を選択したのは私を含めて四人で、音系はたしか二人という少数派だった。私たち美系は皆が古典や数学を必死に勉強しているとき、優雅(?)に石膏像に向かつてデッサンをしていた。それが私と美術の関わりの始まりで、はやいものであれから二十年が過ぎた。



(東京芸術大学彫刻科 専任講師 69回)

を彫刻というカタチに置き変える作業は、昔話の「鶴の恩返し」の鶴が、自身の羽根を織るようで、優雅とはほど遠いところにあるように思う。

通信制は

宝の玉手箱

尾張 久雄

○月×日、なにげなく手にした用紙の記入欄に無遠慮なキツイひと言。

「父親の最終学歴」……長男が保育園

に入園する際に必要な提出書類の一項目であった。何故、どうしてと社会に疑問を抱いたのは確かだった。人間不

在、一枚の薄っぺらの紙片の一項で評価されてたまるかと、学歴社会の風潮に憤りを強く感じたものでした。

通信制入学式の日。希望と緊張感が交錯するなかで、この人もあの人も学歴社会に戸惑い、義務教育の力の無さを悟り、自らの戒めをもつての学業へ再挑戦だろうかと、身勝手な推察をしたものでした。

暗れて高校生になったのが二八才、当時としては平均年齢ぐらいだろうか、一般的に言われる高校生活とは違いが

多く、それが緊張緩和の糸口となり楽しく、月二回のスクーリング日が待ちどおしく思えたものでした。

生徒より先生が若い、確かに教科からみれば師であります、人生から見ると先生より生徒の大先輩がウヨウヨ。メダカの学校ではないが、誰が生徒か先生か？。入学当初は、控室の角や廊下でヒソヒソと「アレ先生か？生徒か？」と言った具合。私も勤めを終えると、自宅でささやかな晩酌なんぞやっているが、学校と名がつくと高々の看板の品位低落を気づかい御法度。しかし諸先生方と個人的にお付き合いをさせていただくことも度々。夜の巷を肩を組み右にヨロリ、左にヨロリ、飲みすぎて先生に理屈をこねくり回したり、美人先生に口説きかけそうになったりした事を、この回想記に筆を走らせながらヒヤヒヤ思い出しています。先生方も未成年者の生徒とはちがって大人同志のお付き合いの時と状況により使い分けて下さり有難うございました。

さて、通信教育といえは独学の泣きごとの一つ位出てもいいのだが、利害を抜きにした人との触れ合いの素晴らしさが優先して、頭がそちらに回らない。異業種の集まりであり、同窓生であり同じ目標に向かい、仲が良くてライバル関係、更に社会経験が豊富で人の心も理解しあえる。本来の勉強も学べて更に大きな付加価値がおまけとして

付いてくる。本当に言うことなし、本人の好奇心次第で面白くなる生徒関係は、いつも情報満載でした。

こうして在学中の頃を改めて思い起こすと、自分の事でありながら氣迫があったなあと、今日の虚脱感はどうしたことかと、卒業の日から既に一二年私は無理矢理に明日へ食らいつく生き方をしているのに、回想記執筆のおかげで若さの欠落に氣付いてしまったらしい。老いを悟らせ、志気を吸いとる原稿執筆は考えものだ。

(通信制 19回)

返ってきた鉛筆

松本 資雄

人生、何がプラスになるか分からない。過ぎ去って眺める自分の足跡に、すてきな体験が、たくさんあったのだと感心してしまう此の頃である。

高々の校舎が焼け、練兵場の建物で勉強していた時のことである。

その夜は、昼間の仕事の疲れで授業の終わりが待ち遠しく、やっと終わって帰宅。一休みしてノート整理をしようとして、筆箱を学校に忘れてきたことに氣がついた。

物を大切にしていた時代でもあり、忘れ物をしてくる事は、少なくとも、

私にとっては恥ずかしい事であった。

机の中に入れてあるので、無くなることもあるまい。それでも、次の日は早めに教室に行った。机の中を見た。あった。誰もいじらないで、忘れられたままにしておいてくれたのだ。誰に言うともなく、感謝のことはを言いがら、筆箱をあけてびっくり、中味がない。机の中を手でさぐり、また、覗いたが無い。

一体誰が持ってたのか。何故、箱だけあるのか。もしかして、鉛筆はどこかの机の中？ 教室中を捜したが無い。「勉強道具を忘れるなんて、だらしないぞ。一日預かるよ」との忠告か。次々と、あらぬことが過ぎる。

戦後の混乱が続いた時、私の家でも米を俵ごと盗まれたり、リヤカーのタイヤとチューブだけ取られたり、山羊を盗まれたりしたことがあった。

だが、世の中は、少しずつ落ちつきが出てきた時でもあり、たかが、鉛筆ぐらいで、人を疑いたくない。しばらく暗い気持ちではんやりしていた。

その時、ふと置き手紙を書くことを思いついた。

「……どなたか存じませんが、多分、貴殿が鉛筆を忘れて、借りたのだと思います。ご用が済んだらお返し下さい。」

こんな意味の手紙を書いた自分が、おかしくなった。何やら明るい光がさしてきたような気分になっていった。



現在の大塚先生(前列右)、園部担任の西沢先生(前列左)と共に。筆者(中列右より2番目)

それから、二三日後か記憶が定かでないが、筆箱の中に消しゴムをはじめ筆箱の中味がそっくり戻っていたのである。その時の感動は忘れられない。小学校の先生になって「誰ちゃんの靴がない。誰ちゃんがかくした。かくなさい。」等々の事件が起きたりすると、学級会で、時には、道徳の時間にこの時の出来事を話した。これからも機会があれば話すであらう。

子ども達の前で話す時、半信半疑の中にも、何とか人を信じようとする気持ち、きつと戻って来る、戻って来るようにと祈った自分と、少年のような感動が、今も鮮明に思い出されてくるのである。

(東京都青梅市立友田小学校長 定時制8回)

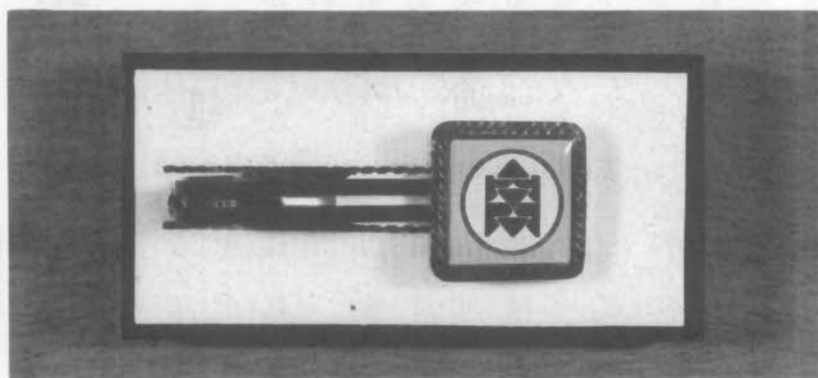
卒業生にネクタイピン

写真のネクタイピンは、平成元年三月卒業の第八回卒業生に同窓会が贈った記念品です。スクールカラーのセルリアンブルーの中に、金色の校章を配したラッカーエポキシ仕上げ、金メッキの縁どりをし、裏面に第八八回（一九八九）高崎高等学校同窓会の刻字が入ったもので、卒業生には大好評を博しました。

同窓会活動は広汎な卒業生の協力なしには維持できません。幸いにも目下本同窓会は順調に活動を続けられておりますが、こうした順調な活動をいつまでも維持するためには、若い同窓生の母校・同窓会への愛着・関心を高めることが肝要です。このことにつき、昨年末常任理事会、理事会で検討の結果、死蔵されてしまう記念品ではなく、日常生活の中に気軽に使用でき、母校意識の昂揚に役立つものとして、校章入りネクタイピンの贈呈が決まりました。

この決定をうけて、デザインを校内幹事田端先生が担当し製品化がすすめられ、本年二月中旬に完成し、卒業式後の同窓会入会式で、柴山会長より各クラス代表に手渡されました。

初めての試みでもあり、卒業生の反応が気にかかりましたが、大好評であったとの



各担任からの報告がありました。また、常任理事会、理事会で披露しましたところ好評をえ、一般同窓生からも引き合いがありましたので、新年総会の際には実費にて頒布の予定です。（同窓会事務局）

京浜同窓会

中曾根 信雄

六月二十二日より二十七日まで、片岡町に新築オープンしたミニ美術館のようなレインガ造りの広瀬画廊で個展を開き、その翌日に翠櫛の碑を見に行きました。これは私の一年上の重田先生より下絵を頼まれて描いたもので、式典には同級生も多数出席された由、大変嬉しく思いました。さて長い間京浜同窓会を熱心に育て後援

して頂いた高間繁会長が亡くなり、同窓会としても大変残念に思います。会長の功績につきましては、福田前総理や南雲先生が本書の中に詳しくお書き下さると思います。

本年の活動としては、

●二月二十二日、新年会をかねて開き今年度の事業計画と運営について話し合いをしました。

四月二十四日、役員会。

●六月十六日、幹事会（蔵前工業会館）で新会長に南雲今朝雄氏を選出し、事務局を六本木の日ソ交流協会に移すことになりました。

●今年度の総会は十月十七日蔵前工業会館で開催します。

●七月一日、銀座の事務所を六本木に移転しました。

●八月二十一日、役員会を開き、京浜同窓会誌「翠櫛」の発行や京浜高々同窓会について相談しました。

その他としては、三月七日の母校卒業式に、樋口実氏（氏）が代表で出席しました。

猶、四月十四日の高間前会長の葬儀には京浜同窓会の有志が出席しました。

以上の経過で分ると思いますが、今年度からは新入会員の歓迎会がなくなりました。この理由は色々ありますが、迎える会員の出席数が少なくなり、高崎での母校の同窓会に出席する人達が多くなったこともあります。京浜同窓会も各期の幹事の努力に

よりもっとく発展させることを考えております。

最後に益々の母校のご発展をお祈り致します。
(洋画家 39回)



広瀬画廊にて個展開催

ただき、厚く御礼申し上げます。

設立以来、五年を迎えて、柴山理事長以下、新たに理事に選任された方々と共に、財団設立の趣旨に、いささかも悖ることなく事業を鋭意執行しております。

然し乍ら、甚だ残念なことは、財団設立以来の理事でおられた高橋邦雄・星野行弘両先輩を失なったことです。謹んで哀悼の意を表わすものでございます。財団理事会には皆勤され、只管、こよなく母校を愛し、後輩の成長をひたすら請い願っておられた御両人の衣鉢を継ぐには、欠席がちの理事には耳の痛いことと思いますが、お二人のように理事会に出席することを無言の教訓として受けとめていただくのがお二人の遺志に沿うものと存じます。

五年という節目を総括してみますと、まず第一に設立以来、寄付をいただいた方の御芳名を記して衷心より感謝申し上げます。寄付受入れ年月日順。敬称は略します。

栗本正彦、海老原英吉、安藤文夫、吉見東太郎、小山裕一、原 一雄、小川健二、亀田東伍、豊田一男、松沢睦、高高同窓会、柴山大五郎、富田賢二、須藤元、村田欣哉、土岐正、木村遊奇男、高橋千代三(前事務長)、

以上十七名 一団体。

総計 三百十五万円。尚、同窓会に御寄付下さった先輩は十名おられます。

次に、奨学生は三十一名(うち女子五名)年度別の延べ数は、六十六名(うち女子八

名)。奨学金総額は今年度の子算実行により、七百五十六万円に達する見込みです。

次に、学校教育補助事業につきましては、学芸部、運動部の全国大会出場に際しての派遣資金援助として、百八十万円を給付しております。理事会十三回、評議員会六回、評議員会は森川正三郎(故人)、吉見東太郎、本間憲治、土岐正の諸先輩の議長により運営されました。評議員会の御要望に副い、田端理事の手になる財団設立の趣旨と経緯を盛り込んだリーフレットを奨学生採用通知書伝達式において手渡し、奨学生の自覚と誇りと共に、高高精神の善意の発露であることを周知徹底させております。

現在の基本財産は三千五百二十万円です。

(群馬県歯科医師会常務理事 51回)

須藤良太郎氏

参議院議員当選

本年七月に行われた参議院選挙比例区で50回卒業の須藤良太郎氏が御当選になりました。

須藤氏は東京農工大・東京大学を卒業後、農林水産省に入省し、構造改善局長をされていました。

今後の御活躍を御期待申し上げます。

(同窓会事務局)

翠樹育英会設立五年を

迎えるに当って

翠樹育英会
常務理事 田中 順

同窓会と一心同体と申しましょうか、表裏一体の財団法人翠樹育英会の事業遂行につきましては、常々、御理解と御協力をい

母校だより

◆学芸部報告◆

吹奏楽部 創部五十周年記念演奏会

新聞部 県議会議長賞受賞

囲碁将棋部 全国大会出場



第13回全国高等学校総合文化祭・岡山'89(吹奏楽部門)('89.8.8)

〈吹奏楽部〉

今年の吹奏楽部は、五月二十日「翠巒の碑」の除幕式に参列させていただき、全国高校総合文化祭音楽部門(八月三日、倉敷市民会館)・関東吹奏楽コンクール(九月十六日、宇都宮市民文化会館)に群馬県代表として出場でき、また、創部五十周年記念演奏会九月二十三日、群馬音楽センター)には専門家もおいでのOBの方々と一緒に演奏できたりで、例年の定期演奏会等の行事の他にかなりの演奏活動があり、それだけに収穫の大変多い年でした。青春を高々生活を、勉強のかたわら音楽づくりに傾け、多くの聴衆の前で演奏し脚光を浴びて十二分に満足し、あまりにも印象深いものが多く、生涯忘れ得ぬ年であったと思います。あとになりましたが、柴山会長をは

平成元年度職員異動

○転出者

職名	氏名	勤続年数	転勤先
教頭	塩浦徳三郎	1	高崎東高校校長
教諭	家島啓二	15	伊勢崎東高校教頭
"	染谷秀雄	5	榛名高校教諭
"	齋藤隆雄	5	伊勢崎東高校教諭
"	中島国雄	7	太田女子高校教諭
"	中畑浩	1	前橋東高校教諭
(地公臨)	富田一仁	1	県理蔵文化財調査センター
事務長	高橋千代三	4	退職
専務主事	中澤康夫	6	藤岡北高校

○転入者

職名	氏名	前任校	科目
教頭	宮川清	桐生西高校	社会
教諭	田中彰	万場高校	社会
"	町田仁	渋川高校	国語
"	水上光久	安中実業高校	英語
"	大谷法明	新採用	数学科
(地公臨)	内田竜哉	"	数学
非常勤講師	高橋清一	"	理科
校医	中澤薫	桐生高校	事務
事務長	木暮暢	伊勢崎商業	"
専務主任	山口正章		

〈新聞部〉

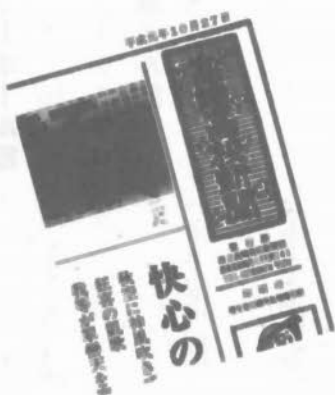
新聞部は、昭和二十五年創部以来、はじめ多くの会員の方々からたくさんのお礼申し上げます。楽器の扱いを更に慎重にさせ、ますます立派な演奏ができるよう、部の発展のため微力ですが全力を尽くしたいと思っております。会員の方々の相変らずのご指導ご支援をお願い申し上げます。申し上げ母校便りといいたします。(吹奏楽部顧問 波戸場研二 52回)

近年では、上毛新聞社主催の群馬県高校新聞コンクールに於て、群馬県教育長賞(昭和六十二年)、群馬県私立中

学高等学校協同会賞(昭和六十三年)、群馬県議会会長賞(平成元年)を受賞しています。本コンクールは昭和六十二年が第一回ですので、高々新聞部は毎回受賞という素晴らしい成績を有しています。これは、高々新聞が高高の名に恥じないものであることを証明することだと確信しています。

現在の新聞部は今回のコンクールにも作品を出品すべく、紙面の企画、構成を論じ合っている最中であり、どうぞこれから新聞部の活動に御協力下さい。

(新聞部長 在校生 小池明久)



〈囲碁・将棋部〉

囲碁では、大江茂広君(二年連続)が個人で、将棋では須田将一君、荻野倫史君、金沢真君が団体で県優勝し、全国大会に出場し、それぞれ三回戦まで進出しました。

またOBの海老原英吉氏から高価な将棋盤を頂きました。厚くお礼申し上げます。

◇運動部報告◇

軟式庭球部・水泳部 陸上部 関東大会出場

本年度は、軟式庭球部、陸上部、水泳部が関東大会に出場いたしました。他にも関東大会出場までいよいよ一步の成績をあげた部はいくつかありましたが、名門高高の運動部としては満足できる結果ではありませんでした。

現在、各部とも捲土重来を期して、関東大会、全国大会を目指して、練習しております。水泳部のように新人大会で好成績をあげた部もあります。今



後もOB諸兄のご期待にそむかぬように一生懸命努力していきたいと思えますので、物心両面のあいかわらずの御支援をよろしくお願い申し上げます。以下に各部の主な成績を御報告いたします。

●野球部

秋季大会二回戦、春季大会三回戦、夏季大会一回戦

●ラグビー部

県総体三位、一年生大会三位、県選手権ベスト8

●サッカー部

県総体ベスト8、インハイ予選ベスト8、県選手権西毛予選敗退

●軟式庭球部

〔団体の部〕 県総体ベスト8、インハイ予選二回戦、新人大会ベスト8、〔個人の部〕 県総体(岡部・富澤組)(梅田・砂賀組)関東大会出場、インハイ予選(梅田・砂賀組)ベスト8、(岡部・富澤組)ベスト16、新人大会(高田・江原組)ベスト16、(梅田・砂賀組)(内田・山田組)

ベスト32

●硬式庭球部

〔団体の部〕 県総体二回戦、新人大会二回戦

〔個人の部〕 インハイ選ダブルスベスト32

●卓球部

〔団体の部〕 県総体ベスト16、インハイ予選ベスト16、新人大会ベスト16





バスケットボール部

県総体ベスト16、インハイ予選二回戦、強化大会Aブロック二回戦

バレーボール部

県総体ベスト8、インハイ予選三位

弓道部

県総体十位、インハイ予選予選敗退

剣道部

県総体二回戦、インハイ予選二回戦
新人大会二回戦、一年生大会準優勝

柔道部

〔団体の部〕 県総体二回戦、インハイ予選三回戦

〔個人の部〕

県総体田村二回戦、丸橋二回戦、
インハイ予選長谷川ベスト8

空手道部

〔団体の部〕 インハイ予選ベスト8
市民大会三位、新人大会ベスト8
〔個人の部〕 県総体(組手)並木・多
胡三回戦、(型)阿部十一位、インハ
イ予選(組手)新井・小池ベスト16、

(型)阿部八位 水泳部

関東大会予選百米、二百米バタフライ中曾根三位、四百米個人メドレー長壁三位、四百米個人メドレーR二位(関東大会出場)

新人大会四百米メドレーR、四百米R、百米自由形高橋、二百米個人メドレー高橋以上一位、四百米個人メドレー萩原二位、八百米R、二百米バタフライ小淵以上三位

スキー部

春季大会スラローム丸山十八位、平野二十三位

山岳部

県総体八位

陸上部

県総体四百米リレー三位、走幅跳佐伯五位(関東大会出場)



第43回

高・前高

定期戦V



(通算23勝15敗3引き分け2中止)

える選手達、そして選手達をあつく見守る応援。これらの強く結びついた高々の総合力に、勝利の女神は微笑まずにはいられなかった。個々の競技にもみな、それ相応に素晴らしいものがあり、白熱に次ぐ白熱があったが、得点表を見ると今年は、部対抗、一般対抗、共に白星を飾っている。やはりこれは、高々全体のレベルの向上と、高々の総合力の賜物ではないかと思う。毎年開催される定期戦。

澄みきった秋の青空のもと、第四三回定期戦本戦の火ぶたは切って落とされた。我々高々は、硬式野球、水泳、及び今年新たに導入された軟式野球を終えて、前日迄に得点こそ九対十二と前

年にリードを許したものの、昨年、一昨年の屈辱を晴らすべく「我が高々に栄光あれ」を合言葉に、宿敵前高に臨んだ。綿密にことを運んだ実行委員会、それに応

高にリードを許したものの、昨年、一昨年の屈辱を晴らすべく「我が高々に栄光あれ」を合言葉に、宿敵前高に臨んだ。綿密にことを運んだ実行委員会、それに応

種別	高一般	々部	前一般	高部
陸上	6	0	3	6
バスケット	5	6	4	0
バレー	4	0	5	6
軟庭	9	6	0	0
卓球	0	6	9	0
ラグビー	/	0	/	6
サッカー	/	0	/	6
柔道	/	6	/	0
剣道	/	0	/	6
空手	/	6	/	0
弓道	/	6	/	0
硬庭	/	6	/	0
硬野	/	3	/	3
軟野	/	0	/	6
駅伝	0	/	9	/
綱引き	3	/	6	/
玉入れ	6	/	3	/
ソフトボール	7.5	/	1.5	/
水泳	6	/	3	/
小計	46.5	45	43.5	39
総合	91.5		82.5	

(定期戦実行委員長 在校生 新井宏幸)

最近の 進学状況について

過去三年間の進路状況は右表の通りです。平成元年入試も、三年担任の先生方を中心にして、学習・生活指導に面接等によるきめ細かな努力が積み重ねられ、最後までねばり強い挽回と

向上で好結果につなげていった生徒が多く見られました。高々の伝統を生かしながら、伝統のかけに停滞しているものがあるとするばそれをどう活性化し定着化してゆくか、学校長を中心として、この課題にとり組んでいます。進路指導面でも、校内成績資料の出力、活用、積み上げ等の新しい方策が試みられ、その継続、定着をはかっています。一人の生徒に

進路状況(全日制)

()内は現役

大学	年次	62年	63年	平成元年	大学	年次	62年	63年	平成元年
北海道		5(3)	6(4)	4(1)	青山学院		10(4)	18(11)	15(8)
東北		13(7)	17(9)	16(6)	学習院		9(5)	6(0)	3(0)
茨城		5(3)	7(2)	5(4)	慶応		34(11)	32(15)	31(9)
筑波		9(6)	2(1)	8(7)	国学院		16(6)	9(3)	8(2)
群馬		45(26)	60(28)	55(34)	芝浦工業		8(2)	4(0)	2(1)
埼玉		8(5)	7(6)	9(6)	上智		11(5)	10(2)	14(9)
千葉		12(7)	9(4)	7(6)	成蹊		4(1)	3(0)	4(2)
東京		12(8)	8(4)	11(6)	中央		47(16)	31(12)	33(13)
東京外語		3(3)	0(0)	5(3)	東京電機		8(1)	12(3)	8(2)
東京工業		4(1)	2(1)	3(2)	東京理科		43(10)	35(4)	32(8)
一橋		3(1)	3(2)	7(2)	東洋		9(1)	8(0)	7(3)
横浜国立		16(4)	6(5)	5(3)	日本		43(12)	40(10)	59(17)
新潟		15(5)	20(11)	14(5)	法政		27(4)	27(5)	25(6)
金沢		15(7)	8(2)	11(7)	明治		66(19)	50(12)	55(18)
信州		7(4)	9(2)	11(4)	明治学院		11(3)	23(2)	22(4)
名古屋		7(3)	8(4)	9(3)	立教		12(4)	17(2)	18(5)
京都		6(4)	7(4)	6(2)	早稲田		59(15)	43(13)	59(15)
高崎経済		25(14)	13(8)	12(4)	同志社		5(1)	7(3)	8(1)
東京都立		4(1)	2(2)	2(1)	立命館		12(4)	10(1)	10(1)
横浜市立		3(1)	5(2)	5(0)	その他		176(49)	149(42)	164(42)

種別合計(全日制)

()内は現役

大学名	62年	63年	平成元年
A 国立	224(117)	223(108)	230(114)
B 公立	40(19)	28(14)	26(6)
C 私立	563(150)	482(119)	526(152)
A + B + C	827(286)	733(241)	782(272)
D 短大、各種他	8(5)	18(4)	8(5)
総数(延数)	835(291)	751(245)	790(277)
卒業生数	402	404	394
現役進学者数	192	165	172
現役合格率($\frac{\text{現役進学者数}}{\text{卒業生数}} \times 100$)	47.6%	41.1%	43.9%

(進路部長・真砂芳夫 61回)

はじまり一人の生徒にかえる」の精神を基本に据え、授業中心に全国に通じる学力を身につけ、各自の志望が現役で達成できるよう努力しています。分離分割制をとる大学の増加(一部の学部も含めると上表の国立大十七校の内十四校)、共通一次から入試センタ一試験へ、また、私立大学のますますの難化等の入試の変動を見据えつつ、国際化、情報化、高齢化のすすむこれから、視野の広い生徒の育成をめざしています。

翠巒文庫

BOOK

卒業生の方や本校にゆかりのある方々の著書で、学校へ寄贈して下さったものを図書室に展示し、生徒に利用させています。翠巒文庫と称し、現在(平成元年・11・10)まで三百九十八冊になりました。本年寄贈していただきました書名を次に記します。

書名 著者

へびの眼 中野完二 54回

小林良曹画集 小林良曹 28回

ルポ・ソビエトNOW 新井康三郎 51回

二つの顔のソ連 "

放送ニュースの書き方 秋田薫 52回

徐徐漂たかさき 内山信次 42回

ウォークラリーハンドブック

実践社員教育マニュアル大塚則弘 63回

物質の究極は何だろうか本間三郎 53回

リゾート新時代の投資戦略 鈴木勝 51回

口述行政法 新井隆一 46回

各方面で活躍の卒業生は多いと思いますが、年々この翠巒文庫への寄贈が少なく、本年は先年の半数となっています。どうか、ご活躍の一端を後輩のためにご寄贈お願いいたします。高々でなければならぬ蔵書をと、図書館では考え資料を集めております。よろしくご協力のほどを。(吉永哲郎 54回)

昭和63年度 同窓会経常会計決算

(昭和63年1月1日～12月31日)

収入の部

費目	昭和63年度予算	昭和63年度実収入	備考
前年度からの繰越金	32,032	32,032	
入会金	850,000	908,000	全日422人、通信32人
維持会費	4,800,000	5,214,000	1,968人
利息	30,000	41,904	
合計	5,712,032	6,195,936	

支出の部

費目	昭和63年度予算	昭和63年度実支出	備考
会議費	600,000	843,525	総会補助60万(63、64年度)
祝賀費	400,000	331,350	京浜同窓会20万 卒業証書筒
雑費	150,000	130,000	63年度転退職員へ
印刷費	100,000	45,910	葬儀花輪代
通信費	300,000	332,632	葉書・切手・ラベル等
旅費	150,000	82,000	京浜同窓会出席者
会報送費	1,280,000	1,166,480	会報発送郵送料
同窓会報費	1,260,000	1,240,800	会報編集・印刷費
事務費	600,000	329,840	人件費・事務用品代
同窓会長賞費	70,000	125,000	記念品代
補助費	600,000	600,000	図書館30万、翠樹体育会30万
雑費	50,000	59,100	名簿係への返金等
予備費	152,032	0	
合計	5,712,032	5,286,643	
差引残高	909,293	609,293	次年度への繰越し
		300,000	100周年基金へ

経常会計・特別会計について上記のとおり報告します。

平成元年1月23日 高同窓会会計 高橋千代三
飯野良二
矢島哲雄

監査の結果、上記報告に誤りのないことを認めます。

平成元年1月23日 高同窓会監査 石井敬之助
安藤震太郎

平成元年度 同窓会経常会計予算案

(昭和64年1月1日～平成元年12月31日)

収入の部

費目	金額	備考
繰越金	609,293	
入会金	850,000	
維持会費	5,000,000	
利息	40,000	
合計	6,499,293	

支出の部

費目	金額	前年比(増○減▽)
会議費	800,000	○ 200,000
祝賀費	300,000	▽ 100,000
雑費	250,000	○ 100,000
印刷費	100,000	
通信費	500,000	○ 200,000
旅費	100,000	▽ 50,000
会報送費	1,300,000	○ 20,000
同窓会報費	1,300,000	○ 40,000
事務費	600,000	
同窓会長賞費	70,000	
補助費	600,000	
雑費	50,000	
予備費	529,293	○ 377,261
合計	6,499,293	

昭和63年度 同窓会特別会計決算

繰越金	8,262,011	支出なし
利息	255,632	
62年度経常会計より	1,300,000	
合計	9,817,643	

創立100周年準備基金特別会計決算

繰越金	3,000,000	支出なし
利息	81,362	
合計	3,081,362	

第88回高同窓会 新年総会へのお誘い

同窓生の皆様には益々お元気で活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、新しい平成の時代を迎え、我々の母校高同も今年で創立九十三年を数え、百周年に向け、着実にかつ力強くその歴史のページを刻んでおります。

新年総会も年々盛況のうちに、行なわれておりますが、我々当番期といたしましても、第八十八回総会が盛大に行なわれますよう、一同努力しております。

なお、総会終了後の懇親会では、古き友、懐かしき友と共に肩を組み声高らかに校歌や翠樹等を歌い、楽しい一時を過ごしたいと思っております。

同窓生の皆様、新年総会には是非お出掛け下さい。一人でも多くのご出席を心よりお待ちしております。

・期日 二年一月二十七日(土)
・時間 午後三時
・場所 高崎ビューホテル
・会費 四、〇〇〇円
(当番期代表 竹内成幸 59回)

◆事務局だより

◎同窓会では会員各位の納入して下さる二千円の会費で運営されています。会費を納入して下さい。会員の数は年々増えておりますが、一層の御協力をよろしくお願い申し上げます。

◎「次回の同窓会名簿の刊行は一九九二年です」

類似の職業別名簿等は本同窓会とは全く関係ございません。種々の問合せが事務局の方に数多くあり難渋しております。本同窓会名簿関係の御通知はすべて高崎市八千代町の高崎高校内事務局よりお出しします。ご注意下さい。◎本校の建造物のなかでは古い方に属する理科棟の改築工事が七月から十月にかけて行われ、生徒棟から理科棟への通路も完成しました。(3ページの写真を御覧下さい)

以上御連絡御報告申し上げます。

編集後記

校庭の銀杏並木もすっかり裸木となり、冬の到来を感じる今日この頃です。八月の編集会議から準備を始めた同窓会報23号が発刊の運びとなりました。御多忙の中、原稿をお寄せ下さいました皆様方に厚くお礼申し上げます。本会報が会員の皆様方と同窓会の良きパイプとなるよう最善の努力をしておりますが、御意見御批判をいただければ幸いです。(本部幹事会)